

大震災・福島第一原発事故から 1年の被災地を歩く



ジャーナリスト
塚本 弘毅

政府と東電に不信感強く

昨年3月11日の東日本大震災から1年が過ぎた。この4月下旬、津波や東京電力福島第一原発事故の大きな被災を受けた福島県南相馬市を中心に、相馬市や飯舘村などを歩いてみた。津波に襲われた沿岸部は、がれきの一部は撤去されたりしていた。しかし、土台しか残っていない家屋跡や、ずたずたにされた海岸線などはそのまま、昨年9月に訪れた時とほとんど変わっていなかった。

不通だったJR常磐線の原ノ町（南相馬市）—相馬（相馬市）駅間は昨年12月に運転を再開したものの、北側の相馬—亘理（宮城県亘理町）駅間と南側の原ノ町—広野（福島県広野町）駅間は運転再開の目安はついていない。総じて本格的な復旧の姿はいまだに見えない。特に未曾有の原発事故の被災を受け、福島県の多くの住民は仮設住宅や県外への避難生活を強いられている。こうした状況から「原発事故は人災」だとし、加害者としての責任が感じられない東電と「原子力ムラ」の一員の政府に対しては強い不信感と深い憤りが住民の心底に感じられた。

警戒区域の再編

東電福島第一原発から20^キ圏の南相馬市に設定されていた警戒区域が4月16日に解除された。大半の区域が早期帰宅を目指す避難指示解除準備区域（年間被ばく線量20^ミシーベルト以下）と、帰還まで数年程度の居住制限区域（同20^ミシーベルト超50^ミ

シーベルト以下）に再編されたのだ。

許可なく立ち入りができるが、宿泊は禁止という避難指示解除準備区域になった同市小高区に入ってみた。海岸から約3^キ離れた小高区役所近くの道路には津波で押し流された乗用車が転がっているなど、津波の猛威を物語っていた。国道6号から海岸寄りの道路を進むと、井田川地区では津波が襲来した水田が湖のようになっていた。

その近くの下浦地区で、家の後片付けしていた島誠さん（81）と、とく子さん（73）夫婦に会った。とくさんは津波に襲われた時、あごまで水につかり玄関の柱につかまってやっと助かったという。

千葉県館山市の次男宅に避難しており、警戒区域解除を受けて次男の車で来た。これまでは防護服に身を固めて3回一時帰宅したことがあるが、普段着で自由に入れたのは初めて。「家がどうなっているか心配で、やっと帰れるようになった。館山でよくしてもらっても、ここに来るとホッとすると2人は口をそろえて話した。小高区に来ると、「顔を見れば懐かしくて」と同市内の仮設住宅に避難している地区の人たちに会って旧交を温める。これからも来るつもりだが、「私らの代で



津波の襲来を受けて湖のようになった水田地帯＝南相馬市小高区で

はここに戻れないだろう」と寂しそうだった。

避難先を転々とし、5月下旬から同市鹿島区の仮設住宅に入居した農業、蒔田利治さん(57)は、家から海が見える同市原町区小浜に住んでいた。津波の襲来を受け、高台に逃げてやっと助かったという。蒔田さんも警戒区域再編で自宅へ一時帰宅できるようになった。もちろん農業が再開できる状態ではなく、「こうなるとは思わなかった。神様が見捨てた」とため息をつく。「今まで原発から我々は何の恩恵を受けていない」と言うだけに、東電にはお金はいいから元の状態に戻してほしいと主張する。

自然豊かな飯舘村も

同市に隣接する飯舘村は放射線量が高いため、現段階では一部の例外を除いて全村避難状態で、役場も村外へ避難している。村内にはほとんど村人は見当たらず、村中央を走る県道を車が通り過ぎていくだけだ。その日は、村の役場には数人の職員が仕事をしていた。

役場前の広場には、村民歌の歌詞が彫られた石碑が建てられている。石碑の前のお地蔵の頭をなでると村民歌が流れる仕組みになっ



南相馬市小高区に隣接する浪江町は今も警戒区域で立ち入り禁止

ている。「夢大らかに」と題されたその歌の一番は「山美わしく水清らかな」から始まり、「今こそ手と手 固くつなぎで 村を興さん 村を興さん」で終わる。清らかな児童合唱の音が流れていく隣には、無粋な放射線の線量計が設置されている。阿武隈山地に抱かれて自然豊かでのどかだった農村も、今の変わり果てた無残な状況を象徴するような光景だ。

先祖に申し訳ない

同村で唯一のコーヒー店「極久里」を経営していた市沢秀耕さん(58)と妻美由紀さん(53)は、昨年7月から避難している福島市で営業を再開した。あくまでも本店は同村とし、「福島店」の看板を掲げている。

秀耕さんは3月、村住民5世帯14人で東電を相手取り東京地裁に提訴した。被ばくや避難生活などで精神的苦痛を受けたとして慰謝料など計約2億6500万円を求めている。

訴訟を起こした理由について、秀耕さんは「ここまで苦勞して飯舘を築いてきた先祖に申し訳が立たないという気持ちからだ」と語る。また、国の原子力損害賠償紛争審査会が示した中間指針では精神的損害の賠償を事故から

半年は1人月額10万円で、その後の半年は同5万円としている。これに対しても、「ハイ分かりました」とハンコを押す気分には到底なれない。生活を根底から変えた加害者の東電の謝意は感じられず、分厚い個人向け損害賠償の請求書類を出したことも許せない。請求書に書いているうちに、領収書に番号をふれとしてい

ることなどに腹が立って仕方がなかった。

今後の生活や店の営業のことを思うと、美由紀さんは「胃袋が痛くなる」ほど思い悩んでいる。秀耕さんは、政府が福島放射線空間線量の予測図を発表した新聞（4月23日）を見て「あっダメかなあ」と思い、村には10年後も帰れないと覚悟した。これからの先行きは、来年ぐらいまでは何とかめどをつきたいという。美由紀さんは東電に対してきっぱりと言う。「昔だったら切腹でしょ。元通りにできなかつたらそれに見合うだけの金銭で払ってください。迷惑をかけているわけだから」。

「闘う」桜井勝延市長

社会学者の開沼博さんが桜井勝延・南相馬市長に対するインタビューを元に構成した「闘う市長 被災地から見えたこの国の真実」（徳間書店）が、最近出版された。まさしく大震災以来、闘っている桜井市長。政府と東電への不信感はかなり根強い。

「東電という言葉の字引で引くと『信頼できない』が出てくる」と言い切るほどだ。政府に対しては優柔不断なので100%そこまで言えないとして、菅直人政権の時もそうだったが野田佳彦政権になると完全に官僚に支配されていると喝破する。官僚のトップクラスは頭はいいけど、現実を知らないで原発事故に対応する能力に欠けると言う。

市長によると、原発事故当時に約7万1,000人だった市の人口が、市外へ避難して一時期8,500～8,800人まで減少した。それが、徐々に戻ってきて現在は約4万4,200人まで回復しているが、放射線が心配な小さい子供たちを抱える家庭など2万6,000人以上もまだ避

難している状態だ。

市長は「帰ってきて再建したいという人はいっぱいいる」と見る。当初から「原発じゃない街づくり」を言ってきたが、今後は再生可能エネルギーを産業の主要な部分と位置付ける。さらに、この地域に住み続けたいという人たちを引き付けるには文化が根付くかどうかだと主張する。工場を誘致すれば何とかかなるような発想の転換を説く。

再稼働は許せない

南相馬市原町区では、昨年12月に政府が発表した「福島第一原発の冷温停止状態と収束宣言」を信用する声はない。理髪店主の石橋勝子さん（67）は「（福島第一原発が）再び爆発したら今度はダメだな」と話し、喫茶店主（70）は「いつでも逃げられるように車のガソリンは常に満タン。非常用の食料なども用意している。自分のことは自分で守らなくては」と言う。家族で乗り込めるように大きな車に買い替えた人もいる。市民には政府、東電、大手マスコミに対する不信感は根強い。

大飯原発などの再稼働問題に対しても、コンビニ経営者の今野晋一さん（60）は「今回の原発事故の検証もなく反省も何もない状態では許されない」と怒る。先に登場した市沢秀耕さんも「これだけ痛めつけられて福島の人たちは許さない」と語っていた。コメの作付けができない同区の専業農業者（61）は「体にダイナマイトを巻いて東電に殴り込みたいほどだ」と息巻く。野田首相が「命をかける」のは消費税増税でなく、いまだ収束していない福島第一原発をはじめとした原発問題ではないか。